

漢人の民間信仰と天理教

戦後台湾における天理教の変容

第2次世界大戦の敗戦により、日本は台湾の領土を失った。新たに統治することになった中華民国（中国国民党）は、台湾社会の日本色を一掃する政策を取った。

これにともない、多くの台湾人信者を持つ嘉義東門教会は会長後継者のK氏が対応策として、台湾の民間信仰の寺廟のように「やしろ」（白木造りで、神社の社殿に習ったもの）の前に木彫りの神像（「天公」と称される玉皇上帝、「太陽公」と称される太陽星君、「太陰媽」と称される太陰星君）を買ってきて並べることにした。また、台湾人の布教所長たちは田舎の寺から観音菩薩や釈迦如来の分身である神像を借りてきて、教会に持ち寄り、神像の前に香炉を置き、線香を差した（黄、299頁）。

このようなカムフラージュが功を奏したのかどうかはさておき、少なくとも嘉義と雲林における天理教に対する弾圧には大きな差が生じた。特に大きな取り締まりを受けなかった嘉義東門教会とは異なり、雲林の斗六教会部内の布教所は厳しい取り締まりを受け、布教所長が繰り返し拘留されることになった。その結果、嘉義東門教会は戦後も天理教であり続けたのとは対照的に、斗六教会部内の布教所は、中国国民党政権による戒厳令下で唯一活動が認められていた宗教組織である中国仏教会の団体会員となり、仏教寺院となってしまったのである。

カムフラージュの方法

ここで考察したいことは、嘉義東門教会によるカムフラージュの方法についてである。つまり、漢人の民間信仰と天理教がどのような関係にあるのかを宗教文化の観点から分析することである。

まず、このカムフラージュの方法は、政府による迫害を避けるために突発的に考えられたものではない。黄智慧が指摘しているように「神の変名」は台湾人信者によるもので、台湾人を対象とする布教が展開されるにつれて余儀なくされた現地語化の結果なのである。具体的には天理教が唯一神として崇拝する神である天理王命は、創造神や絶対神の性質から、台湾人が理解しやすいように、漢人の民間信仰の「天公」に当てはめられた。「天公」は、台湾の民間信仰においては、宇宙人類の創始者であり、民間信仰の万神殿における最高神と考えられていた。この同一視が、嘉義東門教会の初期の台湾信者の間に自然に発生し、初代会長の加藤きんの孫であるK氏の世代になると意識的に布教の際に使われるようになったという（黄、298頁）。

このほかにも、天理教の神の別称である「月日」を説明する際に、K氏は在来の「太陽公」と「太陰媽」を使って説明した。しかし、天理教では人間の身体を創造し、守護するはたらきにおいて、月は男性的性格を持ち、日は女性的性格を持つものとして説かれているのに対して、漢人の民間信仰では「太陽公」が普遍的に万物に熱と光を与える男性神であり、「太陰媽」は子供の成長を見守る女性神であるため、「天公」を使って「天理王命」に当てはめることに、さほどの問題はなかったものの、「太陽公」と「太陰媽」を使って月日を説明するときは神の性別が逆になっ

てしまうため、無理につじつまを合わせざるをえなかった（黄、299頁）。

ここまで見てきたように、戦後の官憲による迫害を逃れる対応策として施されたカムフラージュの神像は、漢人民間信仰による天理教の神名の読み替えであり、それまでにすでに用いられた「神の変名」に合わせたものにすぎなかったのである。

黄智慧は、さらに激しい変容を見せたH布教所についても紹介している。雲林にある北港教会部内のH布教所の初代所長は嘉義東門教会の2代会長に命を助けられて布教に従事するようになった。このH布教所では嘉義東門教会の変装の対応策を見習ってさらに激しい変容を見せることになった。一般的な天理教の教会では参拝の対象は天理王命（中央）、教祖（向かって右）、祖霊（向かって左）の三つの「やしろ」である。しかし、H布教所では神殿内の「やしろ」と鏡を完全にとりやめ、その代わりに神像を彫って、神像だけを参拝の対象とした。祭壇の神像の配置は、真ん中に玉皇大帝（天公）、その両脇に太陽星君と太陰星君が安置され、教祖である中山みきの木像も彫って、祭壇の右側の本来教祖の「やしろ」のあるべき位置に安置した。

そして「やしろ」の中に入っていた「神実」（^{かんざね}神体）は玉皇上帝の神像の背中に穴をあけ、そこに入れることにした。そして、祭壇の左側、もともと祖霊の「やしろ」のあった位置に先祖の位牌が祀られるようになった。

じつは、このような信仰形態の変容は、筆者が調査対象とした、戦後に仏教寺院となった斗六教会部内の元布教所の方法と一致している。つまり、このような変容は、単なるカムフラージュではなく、漢人民間信仰による天理教の読み替えであり、それが顕在化するか否かの差異はあるものの、台湾漢人の宗教文化的スキーマによる天理教認識と捉えることができるのである。

現地習俗・習慣との共存

永尾教昭は、天理教の習俗・習慣との共存について、「天理教に限らず、どの宗教もその宗教が誕生した国や文明圏以外のところに伝道していくためには、当然その地域の既存の宗教との関わりを調整しなくてはいけない」とし、「天理教を信仰するに際してその習俗・習慣をやめさせようとするところには無理があるだろう」と述べ、さらに「宗教から生まれた各文明圏固有の習俗・習慣を、その宗教の否定とともに排斥していけばおそらく海外布教は頓挫するだろう」と指摘している。

このような、台湾の漢人民間信仰と天理教の文化的関係や変容は、今後の台湾における天理教布教を考える上でも、よい参考例となるだろう。

[参考文献]

- 黄智慧（1989）「天理教の台湾における伝道と受容」『民族学研究』54(3):292-309頁。
山西弘朗（2011）『天理教在台湾の信仰形態之変遷：一個宗教人類学的考察』国立政治大学民族学研究科修士論文。
永尾教昭（2022）「習俗・習慣との共存」『グローバル天理』23(11):1頁。